

原稿および「調査ノート」記入例

[原稿の構成]

《文章》

- 1 道名
- 2 タイトル
- 3 概要
- 4 道の紹介（ガイド）
- 5 道の解説（コメント）
- 6 参考資料

《文章以外》

- ・ルート図（GPS データと地形図）
- ・写真、古地図など
- ・イラスト、表など

※枝道についても同様の構成とし、独立したものにする。

*原稿は編集の都合で手を加えることがありますので、あらかじめご承知おきください。

(パイロット調査)

- 調査対象：鎌倉道（町田市北部）
- 調査日時：2020年8月30日（日）
- 調査メンバー：石井、永田、鎌田、青野、近藤

《道名》

鎌倉街道（かまくらかいどう）

《タイトル》

住宅街をたどる、武士たちの道

《概要》

鎌倉街道（かまくらかいどう）は、鎌倉時代において、幕府のある鎌倉と各地を結んだ放射状に延びる道路網のこと。鎌倉往還（かまくらおうかん）や鎌倉道（かまくらみち）とも呼ばれ、また鎌倉海道（かまくらかいどう）とも書く。御家人（注1）がいた東国15カ国のみでなく、越中、飛騨、信州から鎌倉に向かう道筋も何本か確認されており、かなり広範囲に数多く存在したと考えられている。

ただ、江戸時代以後は道路の拡幅もしくは廃れ、あるいは戦後の宅地化などによって、ほとんどが失われ、面影を残す道筋はごくわずかとなっている。

なお、現況の道路で「鎌倉街道」や「かまくらみち」と通称される路線も存在する。

（注1）御家人＝鎌倉幕府の将軍と主従関係を結んだ、幕府直属の武士。

《紹介（ガイド）》

●本町田の住宅街から

町田駅バス停から本町田経由野津田公園行きか本町田・大蔵経由鶴川駅行きの神奈中バスに乗って10分ほど。ひなた村バス停で下車する。降りたところは本町田の住宅街と丘陵の間である。

まずは現鎌倉街道を北の今井谷戸方面に向かう。旧鎌倉街道はこのあたりで現鎌倉街道を斜めに横切り左手の丘陵を登っていくはずだが、民家の庭になっていて入ることはできない。やむなく100mほど現鎌倉街道を歩いて左の道に入り坂を上っていく。左のマンションのあたりで旧鎌倉街道になるので、そのまま道を登っていく。竹林と照葉樹林の丘陵の間に住宅が建ち、昔と今が同居しているような場所である。

坂を登り切ると三叉路が現れるが、ここは右に向かおう。左手の学校との間に灌木に覆われた土手が続くが、よく見ると道型のようなものがある。

土手が尽きた先で道は二又になる。ここは右の道をとると両側は駐車場が目立つようになる。

間もなく道は千代ヶ丘入口の信号で広い道と交差する。行く手の道は二手に分かれているが、ここは右進行方向の尾根の道を行こう。道は住宅街のへりを登っていくが、ふと西側に目を向けると、遠く丹沢や奥多摩の山並みのシルエットが視界に呼び込んでくる。

坂を上り切って少し、左手に送電線鉄塔が現れる。この少し先の高みから行く手を見ると、これから目指す七国山が立ちふさがっている。

●七国山へのルート

ここから道は緩やかな下りにかかる。周囲は木立と畑がパッチワークのように広がり、昭和30年代の多摩丘陵の風景を思い起こさせる。

坂を下りきると切通し状になったT字路に突き当たるが、ここで右上に目を向けると2分ばかり上に庚申仏が鎮座している。昔は庚申仏が立っている場所を旧鎌倉街道が通り、その後切通しが掘削されたようだ。

T字路を右に折れ、すぐに左後方にわかる道を登る。50mほどで住宅が切れ、左手のコナラ林の尾根に

向けて古道の雰囲気は漂う土の道が分かれている。

ここに入り樹林の中の道を登ると、切り切った場所に鎌倉井戸の井桁がある。新田義貞が馬に水を飲ませた井戸として有名だが、時がたち今は枯れて、井桁の中には落ち葉が積もるのみである。右手の高みは七国山の頂上だが、そちらは藪となってどこが一番高いのかさえ定かではない。三等三角点（点名山崎）は頂上の北寄りにあるが、藪の中にひっそりとたたずみ、三角点マニアの好事家以外誰も来ていない模様だ。

すぐ先で道は二手に分かれるが、ここは左の道を行こう。

コナラとクヌギの森の中の道は尾根の上をゆるやかに下っていく。新緑と紅葉の美しい道である。やがて道が二又に分かれるのでここは尾根道から分かれて右の道に入る。そのまま下り続けると道は左に折れるが、正面の農家の敷地を見ると明らかな道型が竹林の中に続いている。残念ながら人の敷地なのでここはあきらめて、いったん古道から分かれよう。

住宅地の道路を右に折れ、さらに右に曲がると、先ほどの農家の門の前に出る。ここからは再び古道をたどる。ただ、あたりは住宅街。全く古道の雰囲気はない。

●鶴見川を渡り野津田公園

そのまま道を行き、丸山橋で鶴見川を渡る。さらに 100m ほど歩くと、右手に野津田町小川の広場があり、その入口には多摩丘陵遊歩道の看板がある。トイレとベンチがあるのでここで休んでいくのも良いだろう。

すぐ先で芝溝街道を渡ると道路脇に野津田公園南口の看板が立っている。そこからは野津田の丘陵に向けて登りとなる。地神塔を見ると、すぐ先で左手に遊歩道がわかれている。

遊歩道に入るとその左は明らかな道型である。道型の中も歩けるようになっているので遊歩道から外れてそちらを登っても良いだろう。

登りきると樹林から抜けて野津田公園の広大な開けたスペースに出る。この場所で遊歩道が交差しているが、ここは鎌倉街道の道標にしたがって正面の道に行く。開けた場所を抜け右手に野球場を見ながら、左の丘陵の中の道に行く。道は丘陵中腹のコナラ林の中に行く気持ちの良い道だ。左手の高みには古道の跡と思われる道型があり、右下には木立越しにグラウンドが見えている。道が北東から北西方向に向きを変えるあたりには、上ノ山遺跡があるはずだが、今や野球場になってしまったようで、そのありかはわからない。

野球場の横を過ぎ、広葉樹林を抜けると、湿生植物園が現れる。小さな橋を渡って右手を見るとここにも古道跡と思われる道型がある。

●いまでも残る小野路宿

北側から野津田公園北口に向かう道路を横切るとすぐにバス道路に出る。出たところには新屋敷のバス停があり、ここからバスに乗ることもできる。

しばらく丘陵に挟まれた谷あいのバス道路を北西に歩いていくと、小野神社前の信号が見えてくる。ここは古代東海道と旧鎌倉街道が合流するジャンクションのような場所である。その先には古の宿場の雰囲気を今に残す小野路の街並みが続き、郷愁を感じさせる。

信号の左手にある建物は宿場の旅籠の一つ「角屋」を改修して整備した休憩施設、「小野路宿里山交流館」である。ここは小野路地域の歴史・自然・文化・に触れあえる場として、地域住民と来訪者が交流する場として、さらには旅籠の風情を監事ながらゆっくりと過ごすことができる場として利用されている施設である。トイレ、休憩、および軽い飲食もできるので、是非立ち寄ってみるといい。

小野路宿里山交流館の西側にはこの地域の鎮守、小野神社があるのでそちらも参拝してみよう。小さな神社だがどこか歴史の重みを感じる社である。

小野路の街並みの中を北西に向かう。道の傍らには請求が流れる水路があり、古の宿場町の風情がそこはかとなく漂う。街並みに右手にはこのあたりをよく行き来した後の新選組隊士たちに関する資料を所蔵する小島資料館があるが、開館日が限られているので、訪れる場合は前もって確認しておく必要がある。

道並みをしばらく行くと、右手の家並みの間に道標がある。ここから街並みから外れて右手の丘陵を登る。登りきる手前で左に分かれる道が旧鎌倉街道だが、そちらに行かずさらに少し登ると、関屋の切通しに出る。

道が尾根をすっぱりと切り取ったようないかにも切通らしい切通しである。この先は後の新選組隊士も歩いた鎌倉街道の支道、布田道である。

●ゴールの妙櫻寺へ

少し戻って左の道を行き、尾根上をたどる。200mほど行くと送電線鉄塔があり、そこからさらに100mほど、道が下りにかかる手前で右手の高みを見るとそちらに上がっていく踏み跡がある。これが旧鎌倉街道である。踏み跡に入るとすぐに踏み跡は明瞭な道となる。コナラの林の中の尾根道を行くと、並行して道型と思われる地形がある。道が林道のようになり、下りにかかるとすぐに開けた駐車場に飛び出る、行く手の右手に妙櫻寺の本堂が見えるがその手前によこやまの道の入口がある。

旧鎌倉街道はこのまま北に向かっていたはずだが、大規模な宅地造成により今は跡形もない。旧鎌倉街道の旅はここをゴールにするのがいいだろう。

○歩行時間

ひなた村バス停—35分—千代ヶ丘入口—50分—七国山—25分—芝溝街道—35分—小野神社前—30分—妙櫻寺

○アクセス

行き

町田駅バス停から神奈中バスで本町田経由野津田公園行きか本町田・大蔵経由鶴川駅行きの神奈中バスに乗って10分ほど。ひなた村バス停で下車。

※町田駅（小田急線）東口改札を出て左側の階段を上って外に出ると少し先に踏切がある。踏切の前で左に曲がって50メートルほど歩いたところに町田駅バス停がある。

帰り

妙櫻寺から尾根幹線を渡り、道路を北に向かって5分ほど歩くと豊ヶ丘六丁目のバス停がある。ここからは多摩センター、永山、聖蹟桜ヶ丘、鶴川駅に向かうバスが出ている。

歩き足りない人は横山の道を東に歩き、終点の丘の上広場から右手の道路に出て東に下っていくと若葉台の駅に出ることができる。（約1時間半）

《解説（コメント）》

●鎌倉街道とは

鎌倉街道の名称は江戸時代、五街道が整備されたあとから呼び方ではないかと言われている。一方、鎌倉道（かまくらみち）の呼び名は鎌倉時代の関東の武士たちが呼びならわしたもので、それに対し鎌倉に住む住民は「信濃路（しなのじ）」、「奥州路（おうしゅうじ）」などその道の行先で呼んでいたようである。

ちなみに『吾妻鑑』と『太平記』にも鎌倉道の上ノ道（かみのみち、かみつみち）、中ノ道（中の路、なかつみち）、下ノ道（しものみち、しもつみち）という名称がよく出てくる。

今回の調査はそのうち「上ノ道」の一部について行われた。この区間は町田市の北部、東京近郊ではおそらく一番鎌倉道の雰囲気が残されている場所であろう。これより北側は多摩センターの大規模団地、南は町田の市街地になっているので、道の跡がほとんど残っておらず調査の対象とはしなかった。

鎌倉街道は鎌倉時代に関東地方やその近辺の武将たちが「いざ鎌倉」と鎌倉にはせ参じた道であるというのが巷で言われている定説である。しかし実態はそれ以前から人々に歩かれていた道をつなげ、一部を整備して地方から鎌倉に向かう軍用道としたものが鎌倉道とよばれるようになったようである。

後世の五街道のようにはっきりとそのルートが定められていたわけではなく、時代によって経路が変わったり、軍用を主体とした道であったため、戦が行われるたびに異なったルートが使われた痕跡もある。

ただ、メインとなる道は大まかに江戸湾あるいは海に沿って下総国府に向かう「下ノ道」、江戸山手を通って奥州に向かう「中ノ道」、武蔵府中を経て上野に向かう「上ノ道」、さらには鶴間あたりで西に向かい、関

東平野の西縁に沿ってやはり上野まで続く「山ノ道」の4ルートが挙げられる。

そのうちの上ノ道は新田義貞の鎌倉攻めで利用されたことがよく知られているが、他にも西行法師や日蓮上人が歩いたことが吾妻鏡や寺泊御書でわかる。

●鎌倉時代以降の道

室町時代初期になっても鎌倉公方や関東管領が鎌倉を拠点にしていたため、軍用の道としての重要度は下ならず、室町後期の北条・上杉の勢力争いもこの道を利用して行われることがあった。

しかし、徳川家康が江戸に拠点を構えてからは五街道を中心とするインフラのシステムが優先されて、生活道としての利用が中心になる。明治になっても生活道としての利用は変わらなかったが、その時はあくまでも一つの地方道にすぎなかった。

これが大きく変わるのが戦後の経済成長の時代である。膨れ上がる東京の人口に対応して、「これまでは田園地帯であった多摩も都市化の波に巻き込まれてしまう。多くの道がその痕跡を失っていったが、特に影響が大きかったのが多摩丘陵の開発である。永山・多摩センターなどの住宅地を開発するため、街道が通っていた丘陵はすっかり元の地形を失い、いまや街道跡をたどることは至難の業になってしまった。

ただ、東京近郊の上ノ道でも、まだ町田市の北部や、埼玉県にはそれほど大きな開発の波に洗われていないので、まだたどろうと思えば道をたどることができる。

そのあたりには昭和30年頃まであった、農村や丘陵がまだ残っており、照葉樹林や耕作地の間を抜けて古道探索をすることができる。

●いまの鎌倉街道

町田市の鎌倉街道はおおむね丘陵の起伏を縫ってつけられている。もともとが軍用の道なので歩きやすいところを縫って目的地へいくのではなく、最短距離を山越え谷越えでたどっているため、平野の道にしては起伏が多い。現在は住宅地になってしまったところも多いが、起伏の多さに加えて森の中の尾根道や谷沿いの街道などもあり、変化にとんだハイキングコースとして人気がある道である。

ただこの部分の北側は多摩センターの大規模造成によりほぼ壊滅的な破壊を受けており南の本町田から原町田にかけても住宅が多く、古の雰囲気を感じることはできない。

道は芝溝（しばみぞ）街道のように舗装された都道だったり、住宅街の中の舗装道だったりするが、一部は昔ながらの道を彷彿とさせる山道やダートの林道もある。さらに一部には「鎌倉街道」の標識が付けられて遊歩道になっているところもある。

町田市の鎌倉街道あたりの自然環境は本来スダジイなどを極相とする照葉樹林となるはずだが、薪の採取など常に人の手が加えられているため、鎌倉時代の時点でもコナラやクヌギなどの陽樹を代表樹種とする落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。また、地形的には谷戸と尾根が入り組んだ典型的な多摩丘陵の地形が広がっている。

(近藤)

●鎌倉街道の特徴と形態

鎌倉街道は軍用道路であったため、平坦な直線距離をとり、見晴らしがいいように丘陵や台地、微高地の尾根を通ることが多い。ただ、道幅が不揃いで、曲がりが多く、複線の区間も多々あった。これは武家や寺社が作った道を利用したためと考えられている。

鎌倉街道の形状は、多くが細長い窪地状であるという特徴を持つ。台地状や原野では両側に土手を築き、急な坂には敷石を用いることもあった。道幅は6mほどあり、馬が2頭並べる幅となっている(図1参照)。

この凹状の形状は、乗馬した状態での進軍が、見破られないための目隠しとも言われている。

700年が経過した現在は、なかば埋もれて幅が狭くなっているが、道路遺構の断面構造(小穴列、硬化層)がわずかながら観察できる場所がある。また、両端あるいは片側の崖状の塁が所々に残っており、つき固めであるためにとても固くしまっており、そこが古くからの道だったことがわかる。よく観察すると、古道の特徴である「酸化鉄」の薄い層が底部に認められる。

●鎌倉街道と地形

鎌倉街道の拠点である鎌倉は、日本最大の平野である関東平野の南端にある。そこから道は扇状に広がるため、おおよそ平らな野を突っ切ることになる。

といって、関東平野は関東造盆地運動により形成されもので、周囲の山地からの土砂が厚く堆積し、それがさらに隆起して丘陵や台地を多く形成している。また、河川の運んだ土砂等の自然堆積物による陸地化も起きており、凹凸が多く平とは言えない。

鎌倉は1方を海に、3方を標高100～150m程度の丘陵に囲まれた天然の要害地で、三浦丘陵と北に続く多摩丘陵の境界付近に位置している。

多摩丘陵は東京の高尾山（八王子市）あたりから三浦半島の南東に向けて、標高50m～300mの範囲で標高差の激しい複雑な丘陵と台地が連なっている。

そのため鎌倉街道は、山越え谷越えで多摩丘陵をたどり、平野の道にしては起伏が多くなっている。

●鎌倉街道は「歴史の道百選」に選定

1996年（昭和41年）に文化庁が選定した「歴史の道百選」に、鎌倉街道も含まれているが、今回取りあげた上ノ道の本町田-小野路部分は含まれていない。参考までにあげておく。

- ・鎌倉街道上道／伊勢根～赤浜、大林坊～川角
- ・鎌倉街道上総路／三ツ作～立野
- ・鎌倉街道七口切通／大仏切通・化粧坂・巨福呂坂・亀ヶ谷坂・朝夷奈切通・名越切通
- ・鎌倉街道御坂路／金川原～御坂峠

●鎌倉街道の調査

野津田公園東側地区の現・野球場付近で、球場建設前の1991年10月から1997年3月まで「町田市野津田上の原遺跡調査会」埋蔵文化財調査が実施された。その結果、中世の鎌倉街道跡と推定される道路状遺構が検出された。当時検出された1号道路状遺構は、最大幅が古代国道級の12mもあり、それらに特徴的な連続するピット列は1～3号道路すべてに顕著に刻まれ国内の遺跡で最も多い1000か所の小穴が見つかった。

貴重な交通遺跡の遺構を破壊しないために、現地の調査終了段階において、現状そのまま覆土して埋蔵保存されている。

●鎌倉街道にまつわる出来事

源頼朝（みなもとよりとも）は1180年（治承4年）の秋に鎌倉入りをしたが、その時に府中から鎌倉街道を通過して鎌倉に入ったという説があり、「吾妻鑑」では鎌倉に入ったことが、「義経記」にはその前に府中に立ち寄ったことが書いてある。しかしその詳細については何にも触れてないため、鎌倉街道ではなく古東海道をたどって鎌倉に入ったことも考えられる。

それから150年ほど後に、鎌倉街道を舞台にしたもっとも有名な出来事が起きた。新田義貞（にったよしさだ）による鎌倉攻めである。

1333年（元弘3年）、金剛山で楠木正成（くすのきまさしげ）を責めていた新田義貞は後醍醐（ごだいご）天皇の綸旨を受けた。清和源氏の一族であり、もともと北条一族の支配を快く思っていなかった義貞は、いったん上野国新田郡に戻り、5月8日、新田の生品（いくしな）明神で兵を挙げた。はじめはたった150騎に過ぎなかったが、南下するにつれ同じような思いを持っていた越後や甲信の兵が加わり、見る見るうちに兵力は膨れ上がっていった。翌日には武蔵国に入ったが、その時点ですでに軍勢は20万7000騎になっていたという。これに対して北条方も大軍を派出し最初の衝突が上ノ道の小手指の周辺であった。この緒戦に勝った新田軍はさらに府中に向かい、次の戦いが分倍河原で行われる。ここで一進一退はあったが、これにも勝利した新田の軍勢は多摩川を渡った先の関戸から軍を3つに分け、最終的に鎌倉に攻め入り、北条氏を滅ぼした。ここをもって鎌倉幕府は終焉を迎えたのである。

新田義貞の軍勢がたどったのはまさに鎌倉街道上ノ道であり、関戸から鎌倉までの経路も主力の本隊が上

の道、あとの二隊も脇道の鎌倉裏街道と鎌倉街道早ノ道をたどったといわれている。歴史を変えたという意味でもまさに新田義貞の鎌倉攻めは鎌倉道最大の歴史的トピックだったのである。

室町時代になってからも鎌倉道上の道は多くの戦の舞台となったが、代表的なものとしては新田義興（につたよしおき）による武蔵野合戦、足利持氏（あしかがもちうじ）、足利成氏（あしかがしげうじ）などの公方をめぐる乱などが挙げられよう。

（近藤）

《参考資料》

●参考文献

宮田太郎『鎌倉古道を探索しよう《鎌倉街道・上道編》』町田市観光コンベンション協会、1500円

宮田太郎『鎌倉街道伝説』ネット武蔵野、2400円

内田晃『40代からの街道歩き《鎌倉街道編》』創英社

蜂矢敬啓『鎌倉街道〈3〉実地調査・史跡編』

栗原伸道『鎌倉街道1 歴史編—武蔵野の歴史』

池上真由美『多摩の街道 下 鎌倉街道』けやき出版

埼玉県教育委員会編『鎌倉街道上道 歴史の道調査報告書 第1集』埼玉県教育委員会

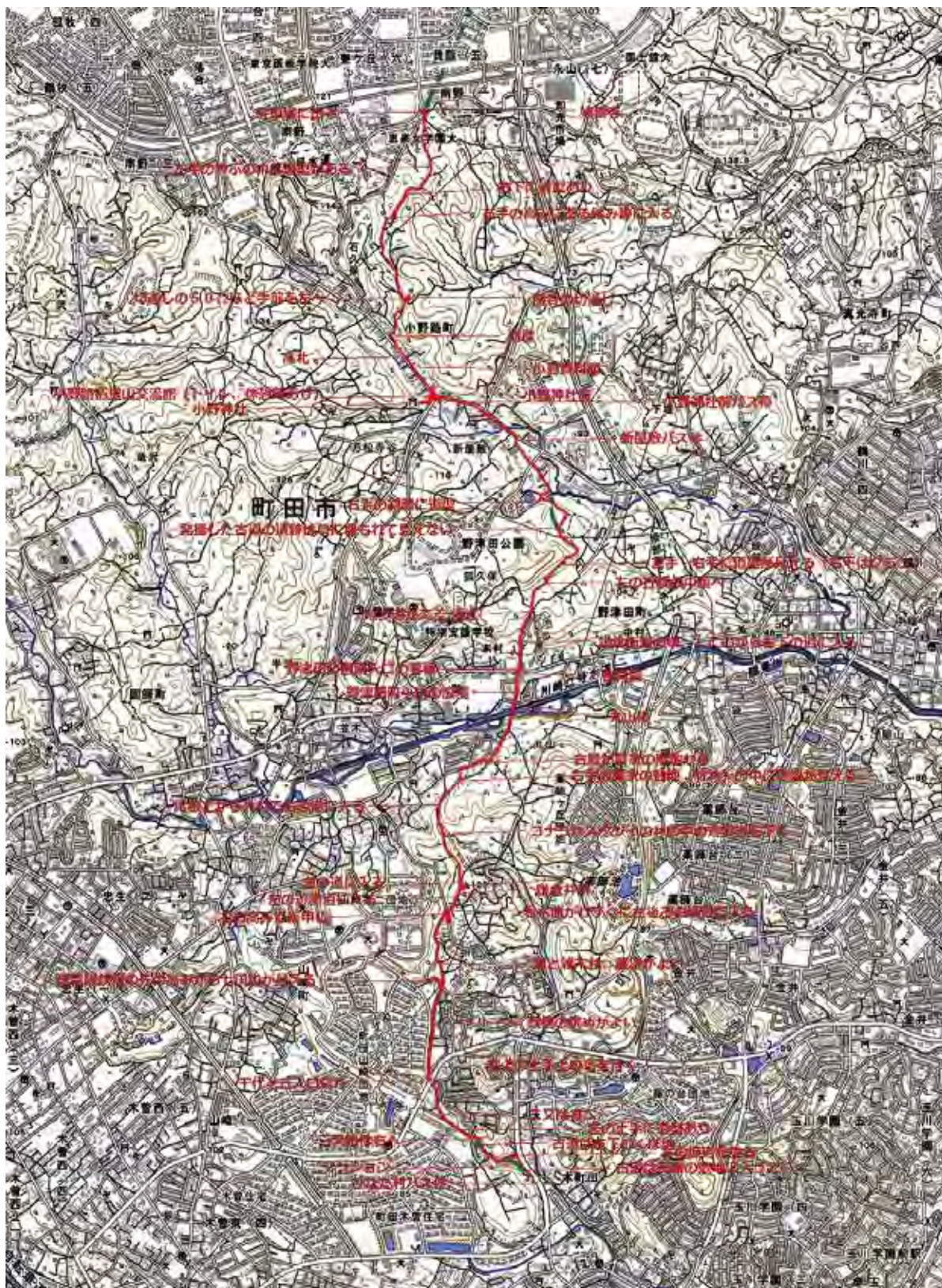
埼玉県立歴史資料館編『県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書：埼玉県歴史の道調査報告書』埼玉県教育委員会

調査ノート [古道の概略図]

見本①

- ※ GPS 軌跡は別途添付ください。
- ※ 別途、地形図にルート、標高、スポット (a～z) を記入ください。
- ※ できるだけ、デジタル原稿 (Excel、Word など) での入稿をお願いします。

[記入事項：方位、地名、スポット (a～z)、アクセス]



調査ノート [古道の概略図]

※ GPS 軌跡は別途添付ください。

※ 別途、地形図にルート、標高、スポット (a~z) を記入ください。

※ できるだけ、デジタル原稿 (Excel、Word など) での入稿をお願いします。

[記入事項：方位、地名、スポット (a~z)、アクセス]



写真例

[鎌倉街道 写真 1/3]



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15

[鎌倉街道 写真説明]

写真 1. 三叉路

ここで鎌倉街道が二つに分かれていたという説がある。

写真 2. 千代の丘入口

ここから街道は団地右上の尾根道に入る。左手にはファミリーマートがある。

写真 3. 七国山（しちこくやま）に向かう尾根道

この付近は畑と木立がモザイク状に広がり、1955 年（昭和 30 年）頃の多摩丘陵の景色を彷彿とさせる。見晴らしが良く、正面に七国山がひとときわ高い。この道を下っていくと写真 4 の庚申仏がある。

写真 4. 庚申仏

今はかなり高い場所に鎮座しているが、街道があったころは横の道がなく、庚申仏のあったところに道があったと考えられている。

写真 5, 6. 鎌倉井戸

町田市の七国山手前の左の路傍に小さな井戸がある。新田義貞は鎌倉攻めの折、ここで馬に水を与えたという言い伝えがある。深さは 4m、円筒形に掘り下げられていたが、現在はすっかり枯れてしまっていて、井戸の中に降り積もった落ち葉が、時の流れを感じさせる。

写真 7、8. 七国山

町田市のほぼ中央、標高 128.4m の山。昔はここから七か国を眺めることができたというが、今はクヌギとコナラの木に覆われ全く展望はない。街道から藪をこいで右手の右の高みに登ると三等三角点（点名：山崎）がある。

写真 9、10. 七国山～丸山橋へ

遊歩道になっている。コナラとクヌギの樹林が美しい。特に春先の新緑と秋の紅葉時に歩いてみたい道である。

写真 11. 地神塔「地神齋」

地神信仰による地神講あるいは社日講によって造立された石塔。社日塔（しゃにちとう）とも。東日本では神奈川県に、西日本では岡山県と香川県に多く分布する。元禄年間に造立が始まり、文化文政期（1804 年 -1830 年）に広まって明治時代までは多く造立されたが、大正以降は少なくなった。側面には「武蔵国多摩郡津田村」とある。

写真 12、13 野津田公園

町田市立の総合公園。公園と周辺の起伏に富んだ地形には緑が多く残り、その中に各種運動施設が点在している。スポーツはもちろん自然観察や散策にも利用され、市民の癒しの場となっている。1991 年（平成 3 年）、野球場の建設にともなって北東エリアの上ノ原で発掘調査が行われ、鎌倉街道とみられる道の遺構が見つかった。上ノ原遺跡と言われるこの遺構によって鎌倉街道の道の構造がかなり明確になった。

写真 14. 小野神社

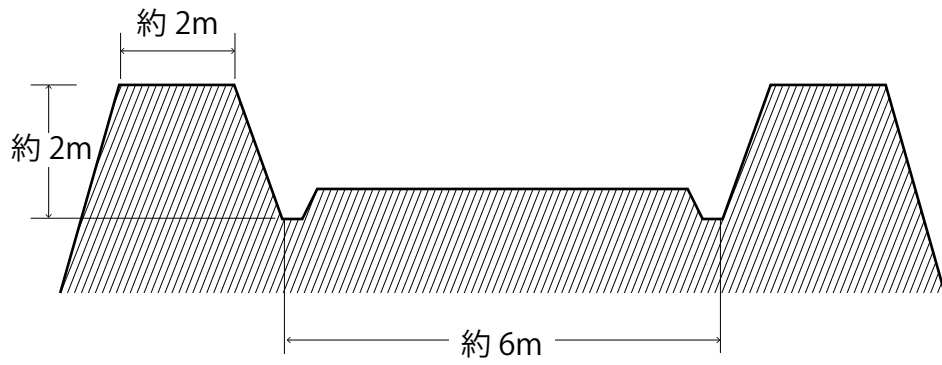
小野路の鎮守。このあたりを領していた武蔵国国司、小野孝泰が先祖の小野篁を祭神として祀った。

写真 15. 関谷の切通し

鎌倉街道支道の布田道の入り口にあたる切通し。「いにしへには行き交う人々賑やかなりて候へど、いまはいと静かなりて候。是より関谷を経て二町ほどにて小野路宿に着き申し候。」と書かれた味のある案内板が立つ。幕末に新選組の近藤勇、土方歳三らが通った道といわれている。

（永田、近藤）

図1 鎌倉街道の断面図



調査ノート [スポットごとの内容 < 1 > メインおよび関係古道]

※スポットごとに本用紙をコピーしてご利用ください。

※できるだけ、デジタル原稿（Excel、Word など）での入稿をお願いします。

※原則として当会で発行する出版物、HP などに掲載する際は、著作権を放棄していただき、パブリックドメインとさせていただきます。

スポット記号 (a～z)：	場所 (比定地)：東京都町田市小野路町
スポットの名称：小野路宿	
<p>スポットの説明：遺跡、石碑、磐座、墓、巨樹、奇石、社寺</p> <p>1. 小野路宿通り 野津田公園を抜けて新屋敷を過ぎると小野路宿通りに出る。ここは鎌倉時代、府中と幕府を結ぶ街道上の宿場として栄えていた。 そして今も昔ながらの板塀と美しい水をたたえるせせらぎ水路が、かつての長閑な風景を想起させる。 ここを訪れたら旅籠『角屋』の改修した町田市の施設、小野路宿里山交流館でちょっとひと休みするといいい。 角屋を営んでいた細野家の母屋や土蔵など、当時の間取りがほぼそのまま再現されていて、交流スペースや物産販売コーナーもあるので、小野路地域の歴史・自然・文化に触れあうことができる。</p> <p>2. 小島 (こじま) 資料館 新撰組などに関する資料を保存し、公開している。 近藤からの手紙、「沖田総司年賀状」・「近藤勇稽古着」・「新選組墨印」などを保存・公開。 また 6,000 点あまりの「小野路組合農兵隊関係資料」(東京都指定有形文化財)・「旧多摩郡小野路村名主小島家文書」(東京都指定有形文化財) など和漢書や記録類を所蔵している。 20 代目の小島為政 (ためまさ) は小野郷学 (おのごうがく) を開いて維新期に活躍した。</p> <p>3. 小野神社 武蔵国司として赴任した小野孝泰 (小野篁の 7 代後の子孫) が、天禄年間 (970～973 年) にこの地に祖先の小野篁を祀ったのが始まりとされる (風土記によると元慶 8 年 (884) 創建とある)。 かつてこの神社にあった鐘は、文明年間に山内上杉氏と扇谷上杉氏が争った際、山内上杉氏の兵によって陣鐘として持ち去られ、現在は神奈川県逗子市沼間の海宝院にて梵鐘として使用されている。 参道脇には「地神」を祀った石塔も建っている。</p>	
見どころなど：	
<p>小野路交流館：小野路宿にあった「角屋」、「福島屋」、「池田屋」、「煙草屋」、「河内屋」、「中屋」という 6 軒の旅籠のうち、旧「角屋」を改修し、観光交流の拠点として再整備した施設。</p>	
参考文献など：	
<p>小野路宿里山交流館 https://www.city.machida.tokyo.jp/kanko/miru_aso/satoyamakoryukan/</p> <p>小島資料館 http://www.kojishir.com/</p>	

(パイロット調査)

- 調査対象：鎌倉裏街道（町田市北部）
- 調査日時：2020年8月30日（日）
- 調査メンバー：石井、永田、鎌田、青野、近藤

●鎌倉裏街道—鎌倉道から派生する枝道

鎌倉裏街道は、多摩市の一ノ宮にあった渡河点（多摩川の渡し場）から、愛宕（あたご）団地の愛宕の切通し、豊ヶ丘北公園を通過して小野路（おのじ）の宿に続く中世の鎌倉街道の一つで、関戸にあった関所を通る煩わしさを避けた道とも考えられる。

江戸時代には日野（ひの）往還や小野路道ともいわれ、後に新撰組となる土方歳三（ひじかたとしぞう）や沖田総司（おきたそうし）らが小野路での出稽古に日野宿方面から通った道でもあった。

《本道途中の多摩市和田や百草に鎌倉時代の遊廊伝承（恋路ヶ原、女沢、鎌倉沢）や、新田義興（義貞の子）らの軍勢が笛を吹きながら豊ヶ丘（笛吹峠）から一本杉の尾根を通ったという行軍伝承などが残されている。

また、幕末に新撰組の土方歳三らが小野路の小島家（現在の小島資料館）へ出稽古に通った道でもある。》（多摩市教育委員会・標柱表）

多摩市の関戸にあった軍事上の関所「霞ノ関」を通らずに鎌倉へ向かう、本道の鎌倉街道よりやや西方の脇街道的な道路。府中市四谷付近から多摩川を渡り、多摩市一ノ宮の小野神社から和田、「愛宕の切通し」を通り、豊ヶ丘北公園（笛吹（ふえふき）峠）付近から一本杉公園、町田市小野路へと続くルートである。（標柱裏）

多摩市側はすっかり開発されて、鎌倉古道の痕跡はほとんど残っていないが、町田市側の小野路・野津田（のつだ）の山中には、いまでも当時の路跡・史跡・遺跡が残っている。

多摩市南野の一本杉公園内には「鎌倉裏街道」と呼ばれる古道が約100m残されている。路面は石畳になっており、古道の東側は谷地で道脇には僅かな土塁状の高まりもみられる。大きな杉が二本あり以前は杉並木があったようである。古道の西側は山の斜面壁になっていて切通道を連想させる。

一本杉公園通り南側に公園西入口があり、その階段の前の説明標柱『小野路道と鎌倉裏街道』に、次の説明がある。

《ここに残る杉並木の存在から、崖上に残る古道跡＝通称「鎌倉裏街道」が確認されました。この道は多摩市一ノ宮にあった渡河点（多摩川の渡し場）から愛宕団地の愛宕の切通し、豊ヶ丘北公園を通る小野路の宿に続く中世の鎌倉街道の一つで、関戸にあった関所を通る煩わしさを避けた道とも考えられます。江戸時代には日野往還や小野路道ともいわれ、後に新撰組となる土方歳三や沖田総司らが小野路での出稽古に日野宿方面から通った道でもあった。》

この古道は、鎌倉街道上ノ道（鎌倉古道）にたいしての裏道ということなのだろうか。この道の西側の多摩市和田や百草には、鎌倉時代の遊郭伝承や、新田義興らの軍勢が笛を吹きながら行軍したという笛吹峠の伝承などもあり、また江戸時代には日野往還や小野路道ともいわれ、幕末の新選組の土方歳三や沖田総司らが小野路での出稽古に通った道でもあると伝えられている。

（石井）

調査ノート〔関係する古道(枝道)の内容〕

1

① 古道の名称	奥州古道(国府街道)(おうしゅうこうどう)	
② 古道の所在地	京都府以北の地域	
③ 古道の全長	(不調査)	④ 調査したメイン古道 (なし)
⑤ 古道の特徴	<p>・奥州古道は、奈良・平安時代に京の都と東国を結んだ官道。別名「国府街道」と呼ばれ国府を結んだ公道。東海道から歩く都人は足柄峠で分かれ、この古道を利用して武蔵、北関東、奥州への向かったとされる。また辺境の防備兵として北九州へ派遣された防人達が通った道でもあると言われている。</p> <p>・多摩丘陵には、武蔵と相模の両国府を結んだとされる奥州古道の存在が確認されている。(以下の⑥、⑫を参照のこと)</p>	
⑥ 概要	<p>・律令政府が作った「古代東海道」が一番古い官道だが、時代が少し進むと古代東海道が南側へ移動したために、武蔵方面への道として国府を結んで作られた道と言われる、</p> <p>・箱根を越えた後、平塚、相模川を經由し座間へ、境川から町田、多摩丘陵を越えて武蔵国府(府中)に至る。その先は東山道武蔵路を北上し足利で東山道本道に入り陸奥へ向かった様である。</p> <p>・奥州古道は時代とともにルートが変化しているようで、多摩丘陵には3つの古道の存在が史跡等で確認されている。(多摩よこやまの道を横断する「中尾道(奥州古道)」、「長坂道(奥州廃道)」、「常盤道(奥州古道)」が確認される。)</p>	
⑦ アクセス(アプローチ方法、時間、距離など)	<p>・多摩丘陵の奥州古道は、「多摩よこやまの道」周辺を歩き、史跡等を確認することである。(「多摩よこやまの道」へは、京王相模線若葉台駅から徒歩15分、全ルートの歩行時間は約3時間半、歩行距離は約10kmである。)</p>	
⑧ 歴史館、郷土館、資料館など	<p>・パルテノン多摩「歴史ミュージアム」(多摩センターから徒歩5分) https://www.parthenon.or.jp/rekishi/index.html</p> <p>・武蔵国府寺跡資料館 http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/kouen/1005196/1004239.html</p>	
⑨ 名称について・(未調査)		
⑩ 道の目的・⑥のとおりである。		
⑪ 社会的評価	<p>・飛鳥時代から平安時代前期にかけて中央政府が計画的に整備・建設した古代道路のひとつである。幹線路であり社会的価値は大である。</p>	
⑫ 古道の現状	<p>・多摩丘陵に奥州古道は、次の史跡が確認されるが、その他さまざまな歴史資料、伝説などにより古道の存在が確認されている。</p> <p>1 「多摩よこやまの道」(中坂公園裏)の「奥州古道の石仏群」がある。</p> <p>2 町田市小野路の浅間神社周辺には、古道の面影が残す場所が存在する。</p> <p>※多摩丘陵北側(多摩市)の地域は、ニュータウン開発で古道は消滅状態であるが、史跡や資料、伝説などの調査で、「鎌倉街道上道」は奥州古道とはほぼ同じ場所を通ったことが考えられる。</p>	
⑬ 古道の地形・(未調査)		
⑭ 自然環境(地質、動植物、雪や風など)・(未調査)		
⑮ 歴史(古道の歴史、時代背景など)・⑥概要を参照		
⑯ 道の形態(道幅、溝、橋、施工技術など)		

古代道路は広い幅員と長大な直線形状を持つ。特に飛鳥時代～奈良時代に建設された道路は、多くの場合 9～12m、畿内に近い地域では 20m の道幅もち、平野部では直線形状が 30 km 以上に及ぶこともあった。丘陵地帯では、斜面を切削し、谷間を埋め立て、直線形状を保つよう設計されていた。東京都国分寺市にある「東山道武蔵路跡」では、古代道路の断面を見ることができる。

⑰景観（見どころ）

・防人（さきもり）見返りの峠：多摩市を一望でき、富士山を望む。

663 年（天智 2 年）、朝鮮半島の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に大敗した日本は、唐への防衛体制を整えるため九州沿岸に東国から防人を徴兵した。防人はこの古代道路を歩いて大宰府をめざした。防人の妻による歌「赤駒を山野に放し捕りかにて 多摩の横山徒歩ゆかやらむ」が『万葉集』に読まれている。

⑱出来ごと・（未調査）

⑲伝説、民話、物語など・（未調査）

⑳人物・（未調査）

21 祭、伝統芸能、伝統技術、風習・（未調査）

22 古地図、絵図、絵画など

・参考資料

『延喜式』

式部健一『古代の道』吉川弘文館

武部健一『道路の日本史』中央公論新社

藤岡謙二郎編『古代日本の交通路 1～4』大明堂

① 古道の名称	大山街道(府中通り大山道)(おおやまかいどう)	
② 古道の所在地	東京都、神奈川県	
③ 古道の全長	(不明)	④ 調査したメイン古道
⑤ 古道の特徴	<p>・江戸中期に賑わった「大山詣で」で大山に向かう「大山街道」は幾つかのルートがあり、「府中通り大山道」は、名前のおり府中から大山への道である。起点は日光街道粕壁宿(春日部市)であり、以北の日光街道沿いの人々が「大山詣で」のために歩いたと考えられる。</p> <p>・今回調査小野路は、大山講の宿場町として大変賑わいがあつた町である。</p>	
⑥ 概要	<p>・府中通り大山道のルートは、日光街道粕壁宿から始まり、岩槻、大宮、荒川羽根倉の渡し(または秋ヶ瀬の渡し)から志木、清瀬、東村山、府中市、関戸の渡し(多摩川)、多摩市、小野路へ、以降、町田市、木曾 - 境川 - 相模原市 - 磯部の渡し(相模川)、厚木市(三田村)から八王子通り大山道を経て大山へと至る。</p> <p>・大山街道は、大山詣でのための道ではなく、各地域の街道には名前が付けられており、当時は統一した名称で呼ばれていなかった。</p>	
⑦ アクセス(アプローチ方法、時間、距離など)	<p>・小野路宿には、「府中通り大山道」が通っており、小野路宿へは京王相模原線多摩センター駅からバス13分「小野路」下車、小田急線鶴川駅からバス16分「小野路」下車。</p>	
⑧ 歴史館、郷土館、資料館など	<p>・小野路宿に「小野路宿里山交流館」がある。</p> <p>https://www.city.machida.tokyo.jp/kanko/miru_aso/satoyamakoryukan/</p>	
⑨ 名称について	<p>・⑥概要を参照のこと。</p>	
⑩ 道の目的	<p>・⑤概要を参照のこと。</p>	
⑪ 社会的評価	<p>・大山道の名称、は一般的には知られているが、街道としては各地域単位で区切られており、社会的評価は「中以下」と思われる。</p>	
⑫ 古道の現状	<p>・小野路宿周辺の道は、「鎌倉街道上ノ道」を利用部分の道は存在が確認できる。</p>	
⑬ 古道の地形	・(未調査)	
⑭ 自然環境(地質、動植物、雪や風など)	・(未調査)	
⑮ 歴史(古道の歴史、時代背景など)	<p>神奈川県の大山は、古くから霊山として信仰されていた。江戸時代には、江戸人口100万に対して年間20万人もの参拝者が訪れたと言われてる。</p>	
⑯ 道の形態(道幅、溝、橋、施工技術など)	・(未調査)	
⑰ 景観(見どころ)	・(未調査)	
⑱ 出来ごと	・(未調査)	
⑲ 伝説、民話、物語など	<p>・「お花講」:大山に参拝するための「大山講」のひとつで、阿夫利神社三大講社のひとつ。夏山開きには</p>	

登山道を開門するといった役割を江戸時代から担うなど、多くの風習が残されている。

⑩人物

・ 貴志又七郎（きしまたしちろう）：観世流能楽者。「大山観世」の名を生んだ大山能の開祖。近世、大山で僧侶と山伏との間で争いが続いていた事態を憂慮した徳川幕府が、は、貴志又七郎を派遣し、双方に能楽を習わせ年に2回披露をさせた。

⑪祭、伝統芸能、伝統技術、風習

・ 倭舞（やまとまい）、巫子舞（みこまい）：大山阿夫利神社の神楽舞として神前に奉納される。

⑫古地図、絵図、絵画など ・ （未調査）

①古道の名称	布田道(鎌倉裏街道)(ふだみち)	
②古道の所在地	東京都、川崎市	
③古道の全長	約13Km	④調査したメイン古道
⑤古道の特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・布田道は、調布の布田宿から小野路までの間道である。 ・布田道は、新選組組長近藤勇が小野路の名主小島家の道場へ剣術指南をしていた関係で、故郷の調布上石原から小野路の間を土方歳三達隊と往還した道と言われている。 ・また、江戸時代、小野路宿から江戸に向かう道としては、甲州街道を経由して一番の近道であった。 	
⑥概要	<ul style="list-style-type: none"> ・布田には、布田五宿といって甲州街道の5つの宿場町（上石原宿、下石原宿、上布田宿、下布田宿、国領宿）が集まり、小野路宿と布田の宿を結んでいたのが布田道であった。 ・調布市に隣接する川崎市黒川地区から町田市北東部の小野路にかけては、谷戸が幾重にも入り組んだ豊かな里風景が広がり、当時の面影を一部残している。 	
⑦アクセス（アプローチ方法、時間、距離など）	<ul style="list-style-type: none"> ・調布市布田には、京王線布田駅で下車する。（布田道途中の黒川地区へは小田急相模原線黒川駅で下車。小野路宿までは約7km、2時間40分、黒川と真光寺町との尾根路には昔の面影が一部残る道がある。） ・小野路宿へは京王相模原線多摩センター駅、小田急線鶴川駅からバスで「小野路」下車。 	
⑧歴史館、郷土館、資料館など	<ul style="list-style-type: none"> ・小野路宿に「小島資料館」がある。 <p>http://www.kojishir.com/</p>	
⑨名称について	<ul style="list-style-type: none"> ・この道が調布の布田五宿へ通じる道筋であることに由来する。（布田道の呼称は、小野路側で使われた。） ・古くは一般的に江戸道と呼ばれ、伊津部では小野路道とも呼ばれた。 	
⑩道の目的	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	
⑪社会的評価	<ul style="list-style-type: none"> ・布田道は、調布の布田五宿と小野路のいわゆる「間道」であり、社会的評価は低いと思われる。 	
⑫古道の現状	<ul style="list-style-type: none"> ・現在の道路は、大半が鶴川街道と称する車道となっている。 ・鶴川街道から山道に入り、特に黒川と真光寺町との境界の尾根道に「布田道」の面影が一部残っている。 	
⑬古道の地形・（未調査）	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	
⑭自然環境（地質、動植物、雪や風など）・（未調査）	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	
⑮歴史（古道の歴史、時代背景など）	<ul style="list-style-type: none"> ・小野路宿の鎌倉古道上道と布田道が交わる辺りに「関屋の切通し」があり、当地の有力御家人だった小山田氏が関所を構えていた場所である。 ・布田宿には大きな炭問屋があり、小野路町の人は布田道を通して炭（良質な黒川炭）を出荷していた。 	
⑯道の形態（道幅、溝、橋、施工技術など）	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	
⑰景観（見どころ）	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	
⑱出来ごと	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	
⑲伝説、民話、物語など	<ul style="list-style-type: none"> ・小野路町の小島史料館刊行『小島日記』、館長小島政孝氏論文『知られざる街道・布田道』（町田地方史研究15号）では、後に新撰組を結成する近藤 勇がしばしば布田道を通して小野路へ剣術を教えに来ていたこと、沖田総司が剣術を教えに来た際に当時流行の麻疹を発病、馬に乗せられ布田宿に送られたこと等が記されている。 	
⑳人物・（未調査）	<ul style="list-style-type: none"> ・（未調査） 	

※ GPS 軌跡は別途添付ください。

※別途、地形図にルート、標高、スポット (a~z) を記入ください。

[記入事項：方位、地名、スポット (メインルートにつづくアルファベット)、アクセス]

地理院地図
GSI Maps

鎌倉裏街道 (日野往還)



[鎌倉裏街道 - - - (鎌倉街道上道 - - - -)]

パンフレットなどの資料があれば、お送りください。

